

目 次

1. はじめに
2. 我が国の武士道について
 - (1) 日本武士道の三つの柱
 - (2) 日本武士道の根源的な思想は何か
 - (3) 『武士道』の本質は何か
 - (4) 『士道』とは
3. 神道と武士道の現代的意義
 - (1) 武士道と騎士道
 - (2) 安全保障に活かす「日本精神」
 - (3) イデオロギーでも理論でもない『感性』の重要性
 - (4) シリアの問題も徹底して本質に迫るのが先決である。
4. おわりに
 - (1) 良識派の存在を活かし擦り寄りを排す
 - (2) 先ず不敗の態勢を築く
 - (3) 驕兵は滅ぶ・忿兵は敗れる・ドアを開けて待ち。暫くは放っておけ。

1. はじめに

国内には中韓に擦り寄る我が同胞達がウヨウヨ居る一方では、悪意に満ちた中韓からの対日攻勢が続いている。「はだしのゲン」等は自虐史観の現れとしての擦り寄りの姿であり、「潘基文国連事務総長の対日批判」、「東京オリンピック招致妨害工作に奔走した韓国」、「オリンピック招致に祝意を避け、安倍人気に警戒感をチラつかせる中国」、「尖閣諸島における一触即発の日中衝突を繰り返す中国」、「中国の揚陸強襲艦建造」、「中国無人機の東シナ海飛行」等が報じられる中、方やワーストNO2の中国人マナーや中国人からの韓国人へのバカ呼ばわり等が伝えられる。一方、25. 9. 7付SK紙は、緯度経度欄で「評価に値する中国良識派の提言」と題して『中国青年報』(中国共産主義青年団の機関紙)の記事内容を解説付きで報じた。これまでの経緯から、本報道はそれ程珍しいものでは無かったものの、「この時期に」と考えると「底流には良識派」が理性的な精神活動を行っている事を再確認できたわけである。本誌は中国共産党の機関紙人民日報の海外版である『環球時報』とは対極にあり、これまでも環球時報の「極端な民族主義的な愛国主義等に警鐘を鳴らしてきているが、今回は、「中国の国民性の未成熟さ」や「鄧小平主導による近代化政策への評価」「近代化政策を進める過程における日本やシンガポール等の協力に対する評価」「文化大革命や現在進めている習近平政権の富国強兵路線への警鐘」等、全く違和感を覚えることなく理解できる極めて良識的な提言である。

中国のみならず、韓国にも当然良識派が居る。歴史認識に関しても命を張って「認識の過ちを指摘する韓国の学者」等も居る。この様な、良識派も交えながら、我が国は粘り強い交渉を以て、ギスギスした国際関係を鎮めていく『我が国の武士道』こそ、自国や世界を救う道に繋がる事をあらためて覚えた次第である。以下は、弊塾(NPO法人孫子経営塾)の第135回(講師: 大正大学名誉教授 清水多吉 先生)及び第136回(講師: 明治神宮至誠館館長 荒谷 卓 先生)の二

回に亘る月例会において学んだ「我が国の武士道」の成果を中心にまとめたものであり、文責は筆者にあることをお断りする。

2. **我が国の武士道について** …… 清水多吉先生。荒谷 卓先生からの学びを中心に

(1) **日本武士道の三つの柱**

我が国の武士道は、古来日本人が大切にしてきた精神文化であり、神道との関わりが根底にあると思う。これは神話の時代に始まり、戦国時代から江戸時代を経て明治・大正・昭和と言う時間を掛けて今日まで引き継がれてきた。勿論、今日の弛んでしまった我が国の姿を観れば、「日本に日本武士道が残っているや否や」という疑問が発せられても可笑しくは無いだろうが、この問題は最後に述べる。

大伴家持家の家訓と言われている『**海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍 大君の辺にこそ死なめ かえりみは せじ(長閑(のど)には死なじ)**』という一説は正に神と現人神の天皇と大伴氏が一体となった復古神道に基づく立派な武士道であると言える。

この根源的な思想が、戦国時代に入り『**甲陽軍鑑・葉隠・五輪の書**』等が出現し江戸時代初期まで我が国の武士道の思想としてその骨幹を為したが、江戸時代中期以降に於いては、**儒教的(朱子学的)倫理に基づく「士道」が主流となり、この傾向が幕末まで続く。**この士道の傾向を資料的におさえたのは、明治から昭和初頭までの井上哲次郎の『**国民道徳論**』であり、和辻哲郎(古川哲史等)による昭和初頭から大東亜戦争前後くらいまでの諸研究『**日本倫理思想史**』にまとめられる。明治以降の考え(国民道徳論や日本倫理思想史等)では、「武士道」(内実には忠君愛国)は封建社会からのものではなく日本古来からのものであると主張されて来ている。(清水多吉:大正大学名誉教授)。新渡戸稲造の『**武士道**』は義を武士道の精神の第一に置いて居る所から『**士道**』の部類である。

江戸中期以降における儒教的倫理に基づく『**士道**』は、かつての武士道を『**邪道**』として退け、「**士農工商を仕切る武士の道**」として『**士道**』が主流となった。その理由としては、儒教の影響を強く受けたことは否めないが、武士は最早戦国時代の武将ではなく、平和時における政治を取り仕切るための最高位にある武士としての正統性を得たのが『**士道**』であろう。

(2) **日本武士道の根源的な思想は何か**

講演内容等から、『**万物の創造の三神**』こそ、復古神道の究極神と言える。つまり、世界の始まりである。先ず天御中主神(アメミナカミノミカミ)が現れ、次いで高皇産靈神(タカムスビノカミ)・神皇産靈神(カミムスビノカミ)の二神が現れる。所謂神道における宇宙観である。『**万物成る**』は「生まれて成って**成長して行くもの**」と言うのが神道の考え方であると理解したが、日本以外では「生まれる事は**存在すること**」と考えられ、「存在するから権利が生まれる」と言う考えが基本だと言われる。二神のムスビの神の「ムスビ」は結び(結婚)に繋がり、生まれてきた男子はヒコだからムスコになり、女子はヒメだからムスメと呼ばれる原点がここにある。そして、これから下る事七代で「瓊瓊杵尊」(イザナギノミコト)が生まれるが、イザナギノミコトはイザナノミコトと結婚して淡路島をはじめとする日本の国土に八つの島(大八島)と35の神を生んだ。又、イザナギノミコトは、日向で「みそぎ」を行いアマテラスオオミカミ(天照大神)(日の神)、ツ

キヨノミコト(月の神)、スサノオノミコト(海の神)を生む。天照大御神は神々の世界(天上の世界)である高天が原を治めるが、スサノオノミコトは父神の命令に背き海原の国を治めず乱暴をはたらいたため天照大神は天の岩戸に隠れ天地は暗やみと成るが、神々が力をあわせて岩戸を開き天照大神は再び姿をみせる。そこでスサノオノミコトは高天が原を追放されて出雲に降り、ヤマタノオロチを退治して、その尾から草薙の剣をとってアマテラスオオミカミに捧げる。そしてスサノオノミコトの子孫の大国主命(オオクニヌシノミコト)は中津國(豊葦原の国:人間の世界)を平定して支配者に成るが、高天が原から使者がきて国土の献上を命じたので国を譲って黄泉の国(ヨミノクニ:地下にあると信じられた死者の世界)へ行く。この国譲りに遣わされたのが「建御雷神」(タケミカズチノカミ)であり、武の神として国譲りの交渉に成功すると共に神武東征においても、天皇の危難を救ったとされる鹿島神宮の祭神である。その時の交渉は、『言向け和平す』(コトムケヤワス)であり、統治の基本を大国主命の「ウシハク(宇斯・領居・主・奴斯等)」「私の管理下に置く事)ではなく、天照大神の『シロシメル(知ろしめる)』(領民の心や状況を知ること)を説き交渉を成功に導いた。然しながらその背景には、剣を立てて武力をもって交渉に臨むと言うのが基本であった。本来武士も武道も『内面的な成長』を目指し、統治は『知ろしめす』こと、外交では『言向け和平す』を基本とするのが我が国の精神文化に基づく遣り方である。

(3)『武士道』の本質は何か……清水太吉先生からの学びを中心に

甲陽軍鑑の書は20巻・59品(章)から成るが、この中には、57 力条のから成諸法度、諸将の成敗、武田軍団の兵力、信玄の合戦、軍法、政刑に関する公事、勝頼の事績など多岐に亘っているが、中世と言う時代を生きた『人間達』であると共に、武士の生き方や心情・考え方等を覗くことが出来る。特に、人間の出来不出来が個人のみならず組織の命運を支配する、それは『日常生活の中における死』との背中合わせの時代的背景が「人間の信頼関係」を重視する。その為に、「吉は悪・悪は吉・勝利は不勝利」(品33)等「勝ち過ぎるな」という『中庸』の思想が観られる。又、至る箇所に「喧嘩」と「喧嘩に対する措置」が観られるのであるが、喧嘩両成敗や追放・島流し等が観られ江戸中期以降の士道とは趣を異にする。方や葉隠においては、「武士道とは死ぬこと偲ぶこと」等に見られる「慚愧の念」が見て取れる一方、「死に遅れた三島由紀夫」等と表現される美学的一面が観られ、明治期に著された新渡戸稲造の武士道とは趣を異にする。

甲陽軍鑑は1615年頃に著され、葉隠は1600年代末頃、五輪の書を著したと言われる宮本武蔵は、1584年から1645年の間生きたと言われるが、何れも戦国時代であるという時代背景を念頭に置く必要は有ろう。

(4)『士道』とは

ア.『士道の基本』

士道は江戸中期以降の正統として士農工商の頂点に立つ「武士の倫理の基本」となった。江戸前期の「武家諸法度」では『殉死』を禁じており、儒教的合理性に基づく文治主義こそ『士道の基本』となった。(実は大化の改新では殉死を禁止しているが、戦国時代に復元の機運が持ち上がる) 山鹿素行(1622-85)の「山鹿語類」の「士道論」は朱子学の影響を強く受けている。

イ. 「士道論」に対する町人層の反発

「曾我物語」「義経記」の人気から「道行き物」(歌舞伎舞踊の一系統で、道行きを扱ったものや男女の心中の道行き、更には一人・親子・主従ものもある)の流行へと移って行った。

元禄15年(1702年)に生じた「赤穂浪士の仇討」に対して、幕府は大石良雄等に切腹を命じた。仇討は、「諸法度上」は法令違反であるが、道徳的には受け入れられた。これに対して朱子学の大元締めとも言える林鳳岡・室鳩巢を中心とする学者達は混乱に陥ったが、これに対して、元々朱子学を学んだ荻生徂徠は、朱子学に立脚した古典解釈を批判し、古代中国の古典を読み解く方法論としての「古文辞学: 故辞学」(護国学派)を確立する。これにより混乱する儒学者達と対立し、仇討は法度に反するものであり、武士の誇りを保つ「切腹」を是とした。そして荻生徂徠は朱子学を解体へと導いたのである。

「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」といった佐藤直方・竹田出雲の三部作が1746年から48年に掛けて著され、これ等は全て『武士道の悲壮美』として町人の間で大評判となった。町人には富豪も生まれたが、例えば「淀屋五衛門」の富は1億両と言われ、当時の幕府財政合計額が50万両/年を考えれば莫大な額であることが分かる。階級的には武士が頂点にはあるものの、経済面における町民の力が絶大であったことが覗われる。

ウ. 江戸後期から幕末に掛けて

佐藤一斎・佐久間象山・吉田松陰と言った師弟関係に有った思想家達は「士道論」であるのには変わりがないが、朱子学に陽明学が加わり、更に蘭学へと移行して行く。当時の学問的なレベルの一端を覗れば、蘭学は、フランスの神父である「ショメール」の辞書から多くのものを学ぶが、これは1770年代に蘭語へ、更に1810年代に和訳されたが、その中味は既に古い情報であった。例えば、薩摩・長州藩などの砲は「青銅砲」(射程2km)であり、鉄砲はナポレオン時代のものであった。これに対して、ペリーの率いた4隻の搭載する砲数は合計80門あり、射程も6kmというものであった。この事実が幕末における諸藩と外国との戦いの帰趨を決定づけた訳である。又、幕末になると、「兵法」も「西欧兵学」「西欧的武器」が導入され、『孫子』は益々、「サムライ」達の心構え化して行く『武士の心得』へと進んだ。

因みに、江戸時代における「孫子」の評価を巡っては三者三様である。江戸中期には、新井白石・荻生徂徠・頼山陽等が夫々の立場で評価している。新井白石は儒学者から蘭学者へと転向したが、「孫武兵法訳副言」で、「『兵は詭道なり』等は、先王の謂う道に非らず」と述べている。先王とは中国古代の聖人『堯舜』を指すが、『徳を以て行う』典型である。一方、荻生徂徠は、「孫子国字解」で、『軍争篇にある『故に兵は詐を以て立ち、利を以て動き、分合を以て変を為す者なり』と、これは一体のものであり、軍争篇を『兵道の全体を説くもの』として評価している。また、同じ軍争篇の『風林火山陰雷』を、兵の妙法を説くとして評価している。頼山陽は、「古文典刑」で、『孫子は名文章家だ』と評している。筆者としては、荻生徂徠が最も孫子の本質を述べている様に思われる。新井白石は、兵法を飽く迄も道徳論から述べているようであり、兵法の本質からは程遠いのではないかと思料する。

エ. 明治期以降

この時期は、福沢諭吉・山岡鉄舟・井上哲次郎・和辻哲郎・新渡戸稲造等が輩出するが、「士道論」に立ったものである。「葉隠」に関する知識が有ったか否か(井上哲次郎は未だ知らなかった:清水多吉先生)は不明であるが、井上哲次郎や和辻哲郎、特に和辻の武士道は、「内実『忠君愛国』は封建社会からのものでは無く、日本古来のものであると主張し、封建的主君への忠誠を天皇への忠誠に置き換えようとするもの」であり、戦前の国民精神文化研究所の国粹主義者達からは、「現人神である天皇に対する態度は、恩顧に対する忠誠と言った関係ではなく、神の前に己をむなしゅうする信仰的態度で有るべきだ」と言う批判の対象となる。新渡戸稲造の「武士道」(“Bushido, The Soul of Japan, An Expectation of Japanese Thought, 1900” 明治33年 アメリカで出版)。(新渡戸は江戸期における「武士道」と「士道」の違いや両者の古典などについての知識は皆無であった:清水太吉先生) ベルギーの法学者である「ド・ラプレー」から、「日本の道德教育」について問われたことについて応えたのが「武士道」だと言われる。彼自身は南部藩の士族出身である事への内的省察から、自分が過去に受けてきた教育を思い返し整理して語った内容であると言われるが、武士道精神の第1義に「義: Justice」に置く所は、彼が明治人であり国際人であることから察せられるのであるが、内容的には江戸中期以降の士道論であるだろう。又、かれはクエーカー教徒であるだけに「愛の精神で終わる武士道」である。(清水多吉先生)

オ. その後の「葉隠」及び「復古神道」

観治天皇の崩御に際しては、乃木希典大将ご夫妻は殉死を遂げる。又、葉隠は昭和に浮上り大東亜戦争へと突入して強調される様になり、各地における玉砕戦等や敗戦に際しては数多くの自決者を出す。更に昭和40年代に起きた「三島事件」では、葉隠の他の一面(美学としての葉隠)である『死に遅れた三島由紀』という評価がなされた。

3. 神道と武士道の現代的意義

(1) 武士道と騎士道

3. 11における自己犠牲にして他者を助ける日本人の姿を各国メディアは伝えたと言われる。是こそが日本の武士道ではないのか?と仏のメディア)は伝えたそうである。武士道は日本人が大切にしてきた精神文化である。神話の時代から有ったものであり、大友家の家訓となっていた「海ゆかば」はこれを裏付けている。元来、天照大神の代々の世継ぎとして「葦の生い茂る実り豊かなこの国を統治」してこられた天皇、その代々の天皇に仕えて来た大伴氏の先祖神である「大久米主」が、かつての今上天皇の東国「陸奥の国」の開発に仕える役柄として、『海を行けば、水に漬かった屍となり、山を行けば、草生す屍となって、大君の御足もとにこそ死のう。後ろを振り返る事はしない』と誓って、正に「益荒男の穢れ無きその名を、遥か昔より現在まで伝えてきた、その様な先祖の末裔なるぞ」。と先祖の立てた誓いを子孫は「先祖の名を絶やさず大君に御仕えするものであると語り継いできた……。」というものである。ここに、我が国の武士道の原点を見出し得るのではなからうか。

一方、騎士道は、元々奴隷の中の体力のある者が、契約的に騎士と成り戦った。所謂「雇用する側から与えられたもの(地位・役割等?)」であり、自ら生み出したものではない。

(荒谷先生)。雇用者側は、『必要な物は戦って相手から取れ』というものであり、教会も騎士を使ったので、教会が与えたルールが『騎士道』となったものである。例えば、十字軍等が派遣された先は惨々に荒らされた訳である。神道は特定の神を指していない、人々は平素から神と共に暮らし、人々が神に近づくのである。例えば明治天皇の立場に立って自分を鍛えて、(成長して)神に近づくのである。(荒谷先生)

荒谷先生が、赴任先の外国でキリスト教信者が戦死した。これに対して『神道による鎮魂祭』を執り行ったが、此の際、「かしこきも……キリスト教徒の……」と「祝詞をあげた」ところ、「神道は異教徒のために祈るのか？」と驚いた外国人の事を、体験談を通じてお話し戴いた。正にこれが神道であり、我が日本人の精神文化である。

(2) 安全保障に活かす「日本精神」

「知ろしめす」事と「言向け和平す」が我が国古来の治め方である。日本人は、猛々しさと和する心を同居させた闘いを本来有しているはずである。所謂、「起ちして已まぬ」から「八紘一宇」そして「共和する」と言う幅広さである。ここ70年で、猛々しさを失ってしまい自らの事は自ら律する心を失った。そろそろ、武に裏付けられた「言向け和平す」と「知ろしめる」ことを日本人は自覚して世界に発信すべきである。7大文明の一つに挙げられた日本文明圏に置かれた日本人は人類共和の礎を有していると言われる。

経済力は極めて重要である。だが経済力向上のために本来の精神を失っては「元も子もない」わけである。国力を益す為に為すべきことは、『成る>在る』・『人>物質』だろう。

孫子の説く『五事七計』(始計篇)で国創りと人創りに努め、『相守る事数年にして、以て一日の勝ちを争う』(用間篇)に基づき、武力の背景無き外交の空しさを埋めるための防衛力を整え、「恨みを減らし、共和への貢献」を果せる日本を目指して我が国が立ち戻ることこそ未来の日本の役割であろう。

(3) イデオロギーでも理論でもない『感性』の重要性

ア. 獅子身中の虫を無力化しなければならない。

昆虫記(ファーブル)には青虫の天敵(マイクロガステル)について記している。青虫はモンシロチョウの幼虫であり、キャベツには青虫が多く見られる。マイクロガステルは翅のある直径 3 mm程の虫だと言う。この虫はモンシロ蝶が産み付けた卵の薄膜の中に胚子を産み付けて、卵の段階から入り込んでいる。卵が青虫と成ると子虫に成長したマイクロガステルは青虫の寄生虫として青虫を殺さない程度に体液を吸って成長し、いよいよ青虫がさなぎと成る段階でその身体をぶち破って外に出て来る。ファーブルは最終章で、「蝶の子孫を絶やすために何と言う恐ろしい活動力だ」と驚き、「生の学理的な強奪だ」と書いている。

マイクロガステルの様「獅子身中の虫」が我が国にはウヨウヨ居る。そしてこれ等が戦後の我が国を骨抜きにしてきた。普通の国では国益を害するような内政問題や外交問題があればこれを解決しようとするが、これをジワジワと阻害するのが我が国の獅子身中の虫である。これは感性の問題ではなく、むしろイデオロギー問題でもある。

イ. 元来のDNAに戻れ

動物記(シートン)の一部作に、「ホービー」という背中にカミソリのような凜々しいタテガミがあり、先祖の豚から数百年掛けて「野生化した牝のイノシシ」だと言う。或る晩秋になって、ホービーは民家の豚小屋に入り込み豚と同居し一冬を過ごす。春になり豚小屋を出て小川にたどり着き小川の水を飲む。そしてやがて森の中に入っていくが、お産のために適所を探す為である。つまり野生に戻ったのである。戦後70年、この間わが民族は家畜化されてきたと言っても過言ではない。あらゆる分野で家畜化へ向かっているように見えるが、僅か70年で本来のDNAが消滅するとは思えない。「国を滅ぼすに刃物は要らぬ、その歴史を抹殺して仕舞えば良い」訳であり、正に戦後の歴史観は全く歪められてきた。だが僅か未だ70年である。元に戻るには十分な可能性がある。これには、単なり理論やイデオロギーではなく、『感性』が重要である。古事記、日本書紀等に観られる日本精神を基礎から学び、感性を磨く必要がありそうである。これこそが、内村鑑三が述べる『後世への最大遺物』ではなかろうか。決して歪んだ歴史観を遺してはならない。

(4)シリアの問題も徹底して本質に迫るのが先決である。

大量破壊兵器の使用は容赦なく制裁を加えるべきである。だが制裁を加える力を有している国は限られている。ロシアも中国も国連も無能であるが、制裁に加わる事も妨げる事も出来る。それだけに使用したか否かについて明確にする事が最も重要であり、使用が明確に証明されたら制裁に打って出るべきであるが、100%証明することは容易ではない。安全も100%の青天井を追求したら却って大問題を引き起こすだろう。大量破壊兵器の使用の可否についても完全証明するならば多大な時間とパワーを必要とするだろう。即ち、一定の対策を講じた上でリスクを負うと言う事は有力な選択である。一定の対策には、国際機関などが一致して「廃棄」を迫る事、「査察」を受け入れる事等は直ぐにでも考えられることである。それでもダメであれば実力行使は止むを得ないだろう。

一国だけでも制裁を加える事の出来る国は現在の所「米国」しかない。だが、無暗な制裁は『恨み』を遺すだけであり決して最善であるとは思わないが、米国が「内向き」に成っていることも否めない。この様な時こそ、本質の追求には各国や国際機関が積極的に乗り出さねばならないだろう。だが、多くの場合本質を問う評論家や政治家は少ない。唯一の原爆の被爆国であるならば、「シリアのアサド政権が化学兵器を使用したのか否か」と言った本質を追求する意見は出ず、観念的な「戦争してはならない」とか「第二のベトナム化」とか「国連の安保理決議で」とか『力の行使は悪である』が前提と成っている。確かに、力で押さえつけられた方には『恨み』が残り、「恨み→テロ→制裁→恨み→テロ」のサイクルは止め処なく続くだろう。だからこそ本質を明らかにすることが最小限必要なのである。勿論、智慧の一つとして「リスクを負う」事は避けられない。「ロシアが廃棄を迫り、国際条約批准をシリアは受け入れた」との報道があった。北朝鮮の核問題の例がある如く、査察は徹底しなければならない。廃棄までに多大な時間を要するのであれば、早急に徹底した査察と確保が不可欠であり、掛かる問題は「嘘」は駆け引きであり、外交的な常套手段でもある。解決には第二の北朝鮮に成らない様な時間的な要素が重要であると思考する。ここに米露等の大国を背景にしつつ、『言

向け和平す』そして『知ろしめす』粘り強い国際的なグローバル化した協力体制の中に『参画』できる機会が我が国には訪れているのではなかろうか。そして中長期的には掛かる国際問題に対して『リード』出来てこそ我が国の役割が実を結ぶ訳である。

4. おわりに

(1) 良識派の存在を活かし擦り寄りを排す

9. 7付SK紙に依れば、8月20日から3日連続で、毛沢東や周恩来の通訳を務めた外交界の長老で駐仏大使でもあった「呉建民」氏の提言を「中国青年報」が伝えたものである。初回では鄧小平の一国二制度による中国の発展と対外関係改善を高く評価し、2日目はアジア太平洋地域が世界経済の中心となりつつある現状」の先導役を務めた日本やシンガポールなどの協力を『恩義を感じるべき』だと強調した。最終回の3日目には、「中国が直面する最大の挑戦は自分自身にある」との見出しで、『中華民族が最も恐れるべきは(指導者が業績を上げようと)頭がのぼせ上って起こす人災だ』と断定し、数千万人の餓死者を出した毛沢東の大躍進政策の悲惨な失敗例を挙げ、諸外国との協力を維持して経済発展の勢いを中断させないように呼びかけた。又、華東師範大学卒後、ドイツに留学し香港フェニックステレビで国際問題の解説者等で活躍中の「邱震海」氏は7月発行の著書で、中国人の未成熟さを指摘し、その端的な例として、①共に救国を唱えながら、100年も内戦を続けた国民党と共産党の事例。②貧しい時は自分を卑下して西洋を仰ぎ見、富を得ると急に傲慢になって軍事に関心を強める。③文革と言う民族の過ちを反省しない。④議論を始めると相手を罵倒し合って、冷静、理性的な議論が出来ない。等を指摘している。更に、国民精神が未成熟なまま愛国主義と言う名の「極端な民族主義」に凝り固まり、国内矛盾そ外に転嫁するような対外拡張の動きを示している事に警鐘を鳴らす。邱氏は「精神の啓蒙を公共の場での理性的な討論を通じて進める」ことを提言する。(以上はSK記事の抜粋)

中国人も朝鮮民族も19世紀から20世紀にかけて自衛の為の戦いで自らの血を流しただろうか。朝鮮半島は中国やロシアからの支配から守るために日本人は血を流したが、特に毛沢東軍や朝鮮民族は自ら戦う事を避けた。日本による併合で朝鮮は守られ繁栄の基礎が築かれたのも事実である。是を正當に認める韓国人有識者も少なくない。

安倍首相は、中韓の指導者達に向かって、「話し合いのドアは開いている」と繰り返している。中韓も上げた拳を降ろすことに困っているようでもあるが、「言向け和平す」「知ろしめす」と言う日本民族の遣り方で応じる事は当たり前である。だが、これまでは余りにも自虐史観に捕われて『言われ無き妥協』と『擦り寄り』が繰り返された。政治家だけでなく、学者・マスコミ・官僚・公務員・教職者・一般国民等の幅広い層でそれが行われてきた。その結果は、特に中韓からの「歪んだ言われなく悪意に満ちた反日感情」を中韓国民に広く植え付ける手助けをして来たとも言えるだろう。

(2) 先ず不敗の態勢を築く

孫子第4「形篇」で、「価値を見ること衆人の知る所に過ぎざるは、善の善なる者に非ざるなり。戦い勝ちて天下善なりと曰うは、善の善なる者に非ざるなり。……古の所謂善く戦う

者は、勝ち易きに勝つ者なり。故に善く戦う者の勝や、奇勝無く、智名も無く、勇功も無し。故に其の戦い勝ちて忒(た)わず。忒(た)ざる者は、其の勝ちを措(お)く所、已(ステ)に敗るる者に勝てばなり。故に善く戦う者は不敗の地に立ち、而して敵の敗を失わざるなり。是の故に勝兵は先ず勝ちて而(シカル)る後に戦いを求め、敗兵は先ず戦いて而る後に勝を求む。」と述べているが、『未だ態勢のはっきりしない内に読み取り、無形の勝ち方をせよ。普通の人では解らない様な勝ち易い機会を捉えてそこで打ち勝て』、「其の勝ち方は人目を引くような勝ち方ではない」、「既に負けている敵に勝っただけである」。「戦いに巧みな者は我が決して負けない態勢に在って敵の態勢が崩れた機会を逃がさないで勝て」と言うものである。言うは易しだが、行うは難し等と言ってはおれない、勝つか負けるかだからだ。かつて日本は1:20と言う国力判断を下しておきながら日米開戦に踏み切って、そして敗れた。熱戦に敗れ、その後の自虐史観を植え付けられて『戦わずして敗れ続けてきた』70年であったのではないだろうか。

だが我々は、気付いたならば失ったものを取り戻せばよい。近現代史を学び直すことだけでも新たな気付きがある。そうすれば、帝国陸軍海軍悪玉論と言う歪んだ史観、原爆投下がアメリカが戦争を早期に終わらせるためでは無かったこと、南京事件が幻であったこと、所謂東京裁判が国際法の常識に基づいた裁判ではなく、勝てば官軍負ければ賊軍そのものであったこと、……等々、沢山の新たな気付きがあることは確かである。

(3) 驕兵は滅ぶ・忿兵は敗れる・ドアを開けて待ち。暫くは放っておけ

『国家の大なるを恃(た)り、民人の衆きを矜(こ)り、敵に威を見さんと欲する者、之を驕兵と謂う』即ち『自らの滅亡を招く』、『小故を争いて恨み、憤怒して忍ばざる者、之を忿兵と謂う』即ち『敗北に結びつく』 (漢書に学ぶ「正しい戦争」・櫻田淳・朝日新書) 正しく前者が現在の中国であり、後者が現在の韓国ではなかろうか

国家にも個人にも本音と建前が有るのは当たり前だろうが、ネットの発達した現在、中国も韓国も我が国もメディアやネット社会を完全にコントロールは出来ないだろう。政府はメディアやネットに関心を持たざるを得ないが、先月の国際会議場における日韓高官の会話では「本当は韓国政府は反日ではない。真意を理解してほしい」等と言う事が報じられている。メディアへやネットへの配慮だろうか。中国と韓国では必ずしも状況は全く同じではない様であるが、本音と建前が最も乖離している国は何処か？ 中国からはサイバー攻撃の予告や尖閣諸島への不法侵入が続くが、相手の挑発に決して乗ることなく、粘り強い冷静な対応と、備えを強化しつつ、『対話のドアは何時でも開いている』ことを繰り返し相手に伝えながらも、我が国はかつての様に『決して相手に擦り寄っていく必要はない』、相手をガンジガラメに囲んでいくわけでもなく、窮鼠猫を食む状況に追い詰めて居る訳でもない。過高断面的に言うならば、『暫くは放っておく』事で十分だろう。 おわり